

甲南女子大学蔵『源氏小鏡』解題と翻刻(上)

米田 明美・中葉 芳子

本稿は、甲南女子大学蔵「光源氏一部連歌寄合之事」(全三冊)の翻刻と解題を記す。

該本は、本大学図書館に残された売買記録によると、昭和四十八(一九七三)年頃に古書店から購入されたもので、昭和三十(一九五五)年三月に古典文庫により『良基連歌論集 三』(岡見正雄)として翻刻されている本の原本である。古典文庫には、書写年代も含め詳しい書誌なども記されておらず、また朱点・割注の取り扱いや翻刻誤りもある。古典文庫に掲載されてから長く所在不明になっていた故、諸本分類における該本の位置付けも困難であったようだが、この度の調査により書写年代や伝来を含め、新たに判明した点もあるのでここに詳しく紹介したい。

今回は、書誌と翻刻(上)、次号で伝来と翻刻(中)、次々号で該本の特徴と翻刻(下)を示す。

一、書誌

本書は、全三冊。やや小型の四半本で、縦二十一・二糎、横十五・三糎の袋とじ。表紙は灰色の無地で、一冊目の表紙の左上に雲母刷の題簽(縦十六・七糎、横四・八糎)が付く。題簽には何も書かれていない。二冊目三冊目の表紙には題簽はない。丁数は、一冊目は、前に遊紙一丁と墨付き四十六丁、二冊目は前に遊紙一丁と墨付き三十八丁と後ろにも遊紙一丁、三冊目は墨付き五十三丁で遊紙はない。一面につき八行から十一行。

(1) 書写年代は田中登先生の鑑定によると、室町時代中期あたりで後期までは下らな

いとのこと。句読点・濁点・合点は朱で付されており、後補か。一冊目墨付き二丁表右下と三冊目の五十三丁裏に、燕安という蔵書印が押されている。燕安とは「燕安居」と号した小笹喜三(おざさきぞう)のことであろう。小笹は、『平安人物史短冊集影』(一九七三年 思文閣)などの著書があり南画や書に造詣が深く、日本文化財鑑定会会長、陽明文庫の前主事などを務めた人物である。本書は、小笹喜三蔵本に相当する。故に「源氏小鏡」の伝本分類で、小笹喜三本と古典文庫本と両者の名前が挙がっているが、実は同一本であることが判明した。この二書が別々の本として紹介されていたのには理由があり、詳細については次号「伝来」の項で説明したい。

二、翻刻

翻刻に当たっては、

- ・ 朱筆(句読点・濁点・合点)は、書写当初には無かったものと考えこれを省いた。
- ・ 行数および改行については、忠実に翻刻した。
- ・ ルビが付されている場合、ルビはそのまま付けた。
- ・ 小文字の割注については《》で示した。
- ・ ミセケチ・重ね書き・補入については、

ミセケチ

重ね書き い あ (下の字が判読不可の場合は□とする)

補入

補入記号のない場合

あ・い・う

補入記号のある場合

あ○う

「(紙)」とある場合は、小紙片に字を書き貼り付けてあることを示す。

・虫喰いにより判読不可の場合は、□□とし右に「虫喰」と傍記した。

・丁の終わりに「」を付して丁数を入れた。「一オ

・寄合語が列挙されている箇所は、寄合語と寄合語の間に空白が入れられている箇所と、入れられていない箇所があるが、それも当該本の特徴と考えてそのままにした。但し、どちらとも判断し難い箇所は、空白を置くことにした。

ひかるけんしいちふれんかよりあひ之事

第一きりつほ第二は、き、ならひうつせみ

ならひゆふかほ第三わかむらさきならひすへつむはな

第四もみちのか第五はなのえん第六あふひ第

七さかき第八はなちるさと第九すま第十

あかし十一みほつくしならひせきやならひよも

きふ十二ゑあわせ十三まつかせ十四うすくも十

五あさかほ十六おとめ十七たまたまつらならひはつね

ならひほたるならひか、りひならひみゆきなら

ひこてうならひとこなつならひのはきならひふ

ちはかまならひまきはしら十八むめかへ十九

ふちのうらは甘わかな^上廿一かしはき廿二よこふへ

ならひす、むし廿三ゆふきり廿四みのり廿五ま

ほろし廿六くもかくれ廿七こうはい

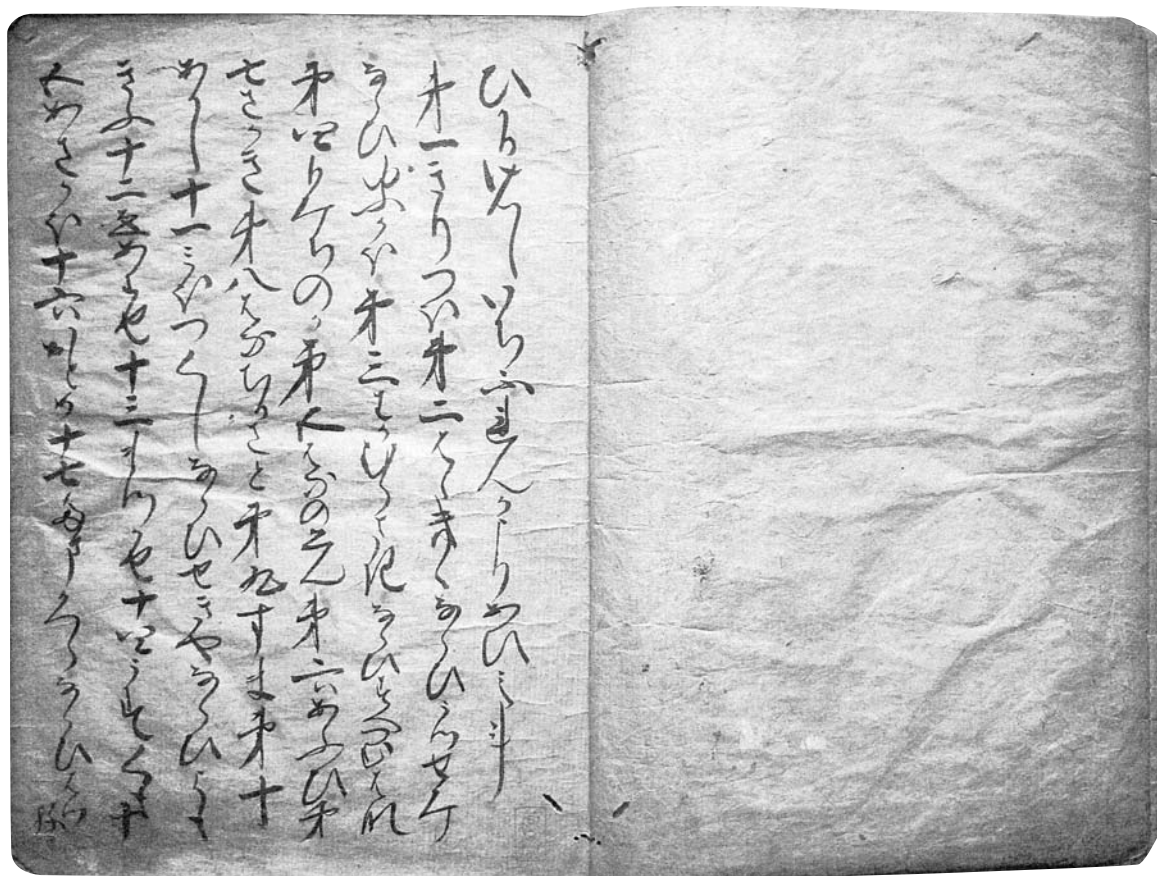
うち十くわん第一はしひめ第二しいかもと第三

あけまき第四さはらひ第五やとりき第六あつまや

第七うき舟第八かけろう第九てならひ

第十ゆめのうきはし

第十ゆめのうきはし



このまきをきりつほといふ事たいりにある御
てんのなり此きりつほにひかるけんしの御
は、御さふらはせ給ふさてこそきりつほのかう

いと申けれこのかういは一の人などの御むすめ

などの事にはなしち、は大なこんにてうせた

まいし人のこなりかたちなたかききこへありて

みやつかへにうちへまいり給ふを御かことこのほかに

ときめかせ給ひしかはかたへの女こかういみやす所

ねたみ給ふさるほとに若きみ一所このかうい

の御はらにいてきさせ給ふ此みや三になり給ふな

つのころ御は、のかういかくれさせ給ふやまひか

きりなれはたいりのうちにて人のかくれなとする

事なきことなれは御いとま申てさとへいてた

まふせめての心さしのせつなれはてくるまの

せんしを給て出給ふ此くるまいみしきくわしよ

くのことなれはおほろけの人はゆるされさりしを

あまりなる御心さしなりそのおりのことはにいき

もたえつ、かきりのつかいさてたいりを出給ふ

ときみかと御なこりおしませ給ひてさまくの

ことをの給ひしか共いきもたえ給て物を申

給ふやうなかりしにうたにいわく

かきりとてわかる、道のかなしきにかまほしきは命なりけり

これはかういのかきりのうたそかし御心のま、ならは

きさきのくらひにもなさまほしくおほしめしたり

しかともかたへのそねみとも又世のそしりを

おほしめしてうせ給ひてのちさうのところへ

しよくをたてさせ給いてさんみのくらぬをおく

らせ給ふかきりのつかいはこれなりかくて秋にもな

「二オ

「二ウ

「三オ

りぬかのうせにしかういのは、もおなしくうち

にさふらはせ給ひしかはわかみや御いみのほとな

れはつれたてまつりてざとにすみ給ふのわき

たちてものあわれなりゆふくれにうちよりの御さ

とへゆふきいのめいふといふ女はうを御つかはせ給ふ

なき人のやとなれはふるさとにもつくへし

そのほとんことはに八ゑむくらむしのねす、むし

くものうへ人 露おきそふる みやきの、こはき

あさちうのやとこれらはかういのだとにての事なれは

なき人のやとなど、いふ事あらはつけへしみかよりの

文かういのは、のもとへわかみやの御ことをよみ給ひし

御うた《みやきの、露ふきむすつかせのおとに》
こはきかもとをおもひこそやれ

かやうによみ給ひしなりさてこの・つかいかへりけるに

おくり物にかういのかしおかれたるくそくともを

とり出されてつかはしたまひ候なりおくりものといふ

事あらはなき人なとつけへしこのかうい人にそ

ねまれてうせにし人なれはその心ねもあるへし

かくてけんし七のとしより御ふみはしめありて

かくもんし給ふにことふゑのおともくもるをひ、かし

何事にも人にはことなりその比からよりはかせ

わたりてありけるに此若みやをあわせさせ給ふ

にかのはかせ此宮の御かたちのひかりか、やきうつ

くしくおはしけるにめて、ひかるきみとなつけたて

まつりしより此けんしをはひかるけんしとは申

なりそれほとんことはふみはしめ七さい四つ、かか

のはかせにあひ給いし所こうろくわんなりいま

の四つかなりけんしのういかふりという事あり

はつもとゆいこむらさきさかつきのつゐて

「三ウ

「四オ

「四ウ

「五オ

《さかつきのつめてに》あふひのうへの事をあけまざりとは
 《おほせいたし給ふなり》かふりし給ひて人になり給へはみやをあらためけん

しのきみ十二にてけんふくしてその日みなもとのう
 ちを給てひかるけんしとはいわる也かのけんふくのひ

●きいれの大しんのむすめに御かとの御はからいにてあわせ
 たてまつりてやかてそのよかの大しんのもとおはします

これをあふひのうゑと申なりはつもとゆいこむらさき

といふことは宮などのけんふく(の)におりこきむらさきのいと
 のひらくみにてもとゆいをとる事ありそれによせ

たるなり又あふひのうへのち、大しんひきつれてま
 いらてのときなりふけにえほしおやなど、いうその

心にやとおほえたりこれらはうゑかふりはつもとゆいな

と、いう事につけへし又このまきにか、やくひの

宮と申人はふちつほのきささきの御ことなりけんしの

御ま、は、也此きささはけんしの御女・かういかくれ給て

のち御かとおほしめしなかせ給て御心なくさますと

し月ふれ共わすれかたくおほしめしてあしたおきさせ

給てあくるもしらすとおほしめしてくるればむなし

き御とこさひしくおほしめしてかたへの女こたち

の御つほねへもすさましくたえては御とのいもなし

くものうゑもなみたにくれてなとなけかせ給ふほとに

御かとのためには御めいにておはしますしのみや御かたち

すくれてきこへなたかくおはしますひめきままし

ますをは、きささきなどいみしくきこえさせ給い

しをないしのすけときこへし女はうき、出して

まいらせ給いけるにまことに御心なくさませ給い

心さしむかしのかういにならひ給ふけんしをひかる

きみと申は此ひめきみか、やくやうにおはしませは

「五ウ

「六オ

「六ウ

か、やく日の宮とよの人申けり御つほねはふちつほ也
 このきみをはけんしおさなくよりお、けなく心にし
 めてつるにしのひくまいいり給いて御こ一人出き

させ給ふれいせんいと申は此御事なり又きりつほの
 御かたと申はけんしち、の御かとの御事を申こと

このまきよりみへ給ふしゆしやうにておはしませはきり

つほの御かたと○見えたりたとへたてまつる御かとはえん

きの御かたと、と見えたり一きりつほのまきのこととはちよくん

とふくうなり おいすけて《ちこのおとなしき》おもやせて

てくるま《こしにかけぬ》いかまほしき《いたなき》なきこかれ

おたき《なまき人をおくる》おかしき《ゆふつくよ》やゑむくら《さほらぬ》

むせかへり

《宮さ、露ふきむすふかせのおとに》人けなき身《数ならぬ心也》

《こはきかをもとおもひこそやれ》人めおとろく

《おしからぬいのちなかさのいたつらに》きぬ一くたり《もちこのうた》

《まつのおもはん事もはつかし》女のかたち《露にぬれつ》思ひけちて

《いと、しくむしのねしけきあさちふの》うちゑみて こま人《おくり》ふちつほ《か、やく》そひふし《はつ

《あらかきせふせしかけのかれしより》人みかたと《たうのわう》にしてふみをよむる《はつ

《こはきかをもとぞしつ心なき》たつね行まほろしかなつてにせん 《たまのありかぞてこしるへく》

《たつね行まほろしかなつてにせん》

此まきに雨の夜の物かたりといふ事はけんしのきみ御

かたかへにたいりのおんとこのいところにおはします御

つれくなくさめにやその比どうの中しやうときこえしは

けんしの御こしうとあほひのうゑのあになりむまの

かみとうしきふといふてんしやう人まいり●くまなきすき

ものなれば物かたり申つめてに人、のしなをわかちせんあく

のことをさたむこれをあめの夜のしなためといふその

「八ウ

ことは此まぢつしのにてうなりふみはかせ ひるます
くせなてしこ てをおりて きくのやと これらの事をは

物かたりにつけへし此まきにとうのちうしやうの物かたりに
たまかつらのないしのかみの事をなてしことかたり出したり
は、はゆふかほのうゑそかし物かたりになてしことあらは
たまかつらと心へしきて此かたかへは四月也よのつね
にはせちふんならてはかたかへといふ事なきこと、みへ
たりむかしの上らふはしきにかたかへといふ事ありし也
さて御いみありしかはさとへ出させおはしまさんとするに

「九オ

ふさかりの方にてわろしこけにんのいよのすけといひ
し人のもとへおはしましてかたかへありかのいゑの
あるしよるこひかしこまりきこの方た・かへにつく

へき事 やり水 しはかき す、しきかけこ

れらをつけへしいよのすけかゝいゑのやりみつせんさいな

「九ウ

とおもしろかりしゆへにこ、へおはしましてかた

たかへありさてあるしいよのすけはきみのおはしま

すかたに御とのいしたるにけんししのひて女はう

たちのねたる所ちかくおはしましてたちき、し給へは

わか御うゑおそいひけるよしつまるほとにしひひ入て

とかくの給ふに女はうおもひかけすおもひて

そのはらやふせやにおふるなのうきにあるにもあらずきゆるは、き、

とよみしゆへにこそ此まきをは、き、とはいひ

けれこの人はわかしなのほどを思ひあかりていよのすけなとか

つまとなるへき人にはあらね共おやなともなくて身あつ

かふ人もなければおもひのほかにかくてゐたる心ねをひ

けてよみしなりさてとかくいひよりほのかにあふ

そのま、にてしはくより給ひしかともつるに又も
あひたてまつらすいよくけんしは御心をつくし思ひ

「一〇オ

給ひけるとかやすゑの世までもはすれ給はていよの
すけししてのちあまになりていたりしをむかへたて
給いてにてうのいんのひんかしのたいにすませられき

「一〇ウ

いよのすけかゝいゑはなかわのわたりなりいまのきやう
こくかわなりかたかへにつけへし此物かたりになてし
ことたまかつらをかたり出す事とうのちうしやう

の物かたりなりむまのかみか物かたりには我かよふ女のもと

ゑわかともたちのやうなる人のかよひけるをもしらす

たいりより出けるに此うへ人くるまにのりてゆかんと

いうをいつくそとおもふにわか行ところなれはあさま

しとおもふに此おとこふゑをふきてそ、なはかせはうち

よりわこんをひく此やとにきくあり又もみちなとあり

けるにうたにいわく《このねもきくもゑならぬやとなから
つれなき人をひきやとめけり》

とよみたりそれよりして此女のもとへゆかすされは心

しらすらん女に心おかせ給ふへしと申たりし也又とう

のちうしやうのなてしことはこれもしのひくかよひ

給いていとあさからす思ひ給ひしにおさあひ人さへ

出き給ひて此よ一とおもはさりしをうるはしき

きたのかたよりおそろしき事をいふとき、てかす

かなるいゑにかくれてゐたりある時とうのきみお

わしたるにさはかしくうらみたりなともせず俣

ちなみたくみてひめきみのことを

山かつのかきもありともおりくにあわれをかけよなてしこの露と

よみたりしその、ちほとなく行かくれたりとかたり

出してなみたくみたりし此人そかし夕かほのま

きにけんしにあいてなにかしのいんにてしにはん

へりなてしことはたまかつらなり十七のまきに見えたり

又とうのしきふか物かたりははかせのむすめのもとへ

「一一ウ

「一一オ

「一二オ

かよひしもある時ゆきたれはものこしにけんさんして
あわすいかにととへはこくねつのさうやくふくして
くさきによりてあわすといへりみな月のからひると
いふ物にやこれはあさましくくさした、おにとこそ

むかひたらめとおもひてかへりしに此女うたに

あふことのよをしへたてぬかならひるまもなにかまはゆるるへき
とよめりとうのしきふ《さ、かにのふるまいしけきゆふくれ》
よみてそのま、ゆかすまめくしき人はかく又
「一二ウ

こわくしてむつかしくよの中のおもふやうなりぬ所

をうちみたれてかたらひし也けんしはくまなき御心ち
出きさせ給てひるますこせといふはこれなりくは

しくは此まきにありは、き、のことわ

てをおりてあひみしことをかそふれはこれひとつとやきみかうきふし

すみつきほのかにたかき物《ふすふる》 たつたひめ《つみな

たなはたのてにもおとるましくきく《もみち 「一二三オ

ふゑ うたふ《さいはらく》

《こからしにふきあわすめるふゑのね#》とこなつ《あらしふきそふ

あなかま《かしがま》 うつせみ《中かは あるし《さかな》 いたつら

ふし おにかみ《うつせみ》 つよき心 かへりみかちに

ならひうつせみ《は、木、やきみかふせやのとなつ》

《うつせみのうつこをのそくてならひ》
《文とはあらてぬる、そてかな》

此まきをうつせみといふ事はは、き、のまきの

かたかへの時いよのすけかさいちよを御らんしてあ
「一二三ウ

かすわすれぬことにおほしめしてかはいゑゑの

やりみつおもしろしとてにわかにかかれかもとへ

おはしますあるしはやり水のめんほくとよろこはされ

ともそのよもあひ給はてむなしくかへり給ふなを御

こ、ろにか、りていかにしてかいひよらましとおほし



めしてかの女はうのおと、いまた十二三はかりにてか
ふるにてあねのもとにありしをめしてやかててん
しやうせさせてわけにんになしていとをしみふかく
し給ふ人その心をしらす此かふるにくわしくいひ
「一四オ

しらせ給ひて御つかひにて文ありその、ちいよのすけ
いなかへ下て人すくなかりしおりふし此こきみを
つれさせ給てひとつくるまにめしてなか河へわたり給ふ
みな人はこのおさあひ人はかりきたると思ひければけんしは
くるまのうちにかくれて人しつまるあいたにかのこ
人をしなんにてのそき給ふかゝる所にまゝ、むすめ
のにし御かたといふとこうちてゐたりその時のことは
「一四ウ

こ かいまみ 夕やみ ひとつくるま とほしひ
こきみ 十とを 廿た 卅 卍 にしのきみこうちはて、
かそへたる心なりさてこうちはて、もろ共にうちふ
しけるを御らんしてしつまるほとにしのはせ給ひて
いか、とうか、い給ふにかの女はうちとけてもねられ
さりければき、しりて人ありと心へてひそかにか
くれぬけんしこれはおなしとこにねたるむすめ
のかくるゝとおほしめしければにしの御かたをはのこし
おきては、の女はうはしのひかくれぬうつせみの
ことくきぬはかりのこしおきけけんし心ならず人
「一五オ

たかへして此むすめにあいてのちおこかましくて
あまた、ひのかたかへなとも此ゆへなりこれにも又
うきなやもれんとかたらはせ給へとももとよりこ
の人には御心さしあらされは又ともあひ給はすその
のち一夜のなさけにのきはのおきといふ御うたあり
御返しにしたおきとよみたりしほとに此人をはし
「一五ウ
たおきともよみたりしうたの心ねまことにゆへ

あるにや又のきはのおき共つけへし心ならぬ事共つけ
へしさて心さし人のぬきおきたりしきぬ
をとりにかへり給ふそのときのことには人にかに
しむうつりかなりさてそのあした文あり

うつせみの身をかへてけるこのもとなを人からのなつかしきかな
さてこそうつせみとはなつけけれこれらはみななつの
事なりうつせみにはいかに人たかへ一よのちきりと
つけへしそのほとのことには おもひこりたる こ
「一六オ

《いよのいけた
のきはのおき》たわむ こゝろなき

ならひ夕かほ 《ゆふかほの花物申やとならば
なとこりすまにくるまたでけん》

此まきをゆふかほといふ事六てうの御やす所とき
こへしはせんふくとて《とうくふ》にてかくれ給ひしみやす
ところ六てうわたりにいとやんことなくておはし
ましきこれはきりつほのみかとの御おとゝにておはし
ましきとうくうにてかくれさせ給ひしかはいとあへ
なくおほしめしてひめきみのおはしますをも
「一六ウ

うちの御このことくおほしめしたり此みやす所へ
けんししのひつ、まいり給ふいといわけなき事よの
人もおもへりさてしはくかよひ給ふみちこてうなる
ところにゆふかほのさきかゝりわたるこいへあるなかに女
ともあまたありてすめるすきかけ見えけりこれそ
は、き、にとうのちうしやうのかたりしなてしこの
ひめきみのは、のかくれていたる所なりある夕くれに
れいの六てうわたりのしのひあるきに御くるまを
おさへてゆふかほの花のしろくさきみたれたるを何の
はなそとたつねさせ給ふにうちよりふしんなくかの
ちうしやうそとおもひてこれにおきてまいらさせ給へ
とてはなをおりてしるきあふきのいたくかんはしき
「一七オ

をたてまつるそのほどのことは しろきあふき

たぞかれ時 そらめ 《ちうしやうとみ
あやまりたる心也》 ひかき こいへ

やりとくちすきかけこれらの事ゆふかほにつけへし

さてけんしの歌に 《よりてこそそれかとも見たぞかれに
ほのく見ゆるゆふかほのはな》

いかにもゆふかほには人たかへとつけてよしさてこそ夕

かほのまきといふ女はうを夕かほのうへといふ事

にてうへかくてけんし・めのとこれみつにおほせつけて

よくくあんないせさせてときくおはしましぬ

これやとふの中しやうのかたりしなしてこのは、にや

とあやしく思ひなからのこさすかよひ給ふほどに秋

にもなりぬ八月十五日のあかつきになにかしのいんへ

いさなひ給ふその夜はかのこいへにと、まり給ふに

となりのいへくめさましくてき、しらすかたはらい

たき物かたりなとするそのほどのことは みたけぬ

かつく からうすのおと となり これらはゆふかほの

くにつけへしさてもみたけにみろくしそんをおか

むをきかせ給ひてちやうせいでんにしてはをなら

へゑたをつらねしちきりをひきかへてみろく

のしゆつせをかねて五十ろくおく七せんまん 「一八ウ

さいとおほしめしけるにや 《うはそくかおこなふ道をしるへにて
こんよもふかきちきりたえずな》

かくのことくなくはなとちきらせ給ひしに十六日の

やちうにし、給ひしそまことにあわれなりしさて

十五日のあかつきに一しやにてなにかしのいんへいさなは

せ給ふしの・めのほのかなるに露ひかりやいかにとの給へは

《ゆふつゆにひもとく花はたぞかれの
ほのかに見えしゑにこそありけれ》 《ひかりありとみしゆふかほのしら露は
たぞかれとよのそらめなりけり》

いひかよはして十六日一日はかのなにかしのいんのあれたるに

おきふしかたらひてくらし給ふそのことはしの、め 「一九オ

露のひかり おなしくるま あれたるやと 水くさ

にうつもる、いけゆみのつるうち こ、にけんしたちを

ぬいてもち給ふ物、あしおとひしくとなりし也さて

いか、せんとてこれみつをめしておほせ合られてきよ

みつにこれみつかしる人のあるかたへむなしきからをとり

いたしてやるなきからをうはむしろにく、みて出し

ければかみこほれ出てめもあやなり此くるまにかのつかい

しうこんといひし女はうのりそいてゆく心の中 「一九ウ

おもひやるもかなしされはきよみつなという事より

あひにつけへしさてけんしあまりあへなくあさましく

おほしめしてこれみつをめしくしてきよ水ま

ておほしきなきからを御らんしていと、思ひまさりた

まひしかうちよりとり出したりければくれなひのみそ

のいろありしをき給ひたりしそのおもかけいかならん

よにかはわするへきとしつみいらせ給いてかへらせ給いて

やかて心ちれいさまにもおはしまさてよのさはきにて

秋のすゑにおこたり給ひしことまことに事わり也

かのうこんをはいみすくるま、にめしよせてつほねこし

らへていとねん比にはこくみてつかはせ給ふふくらかに

色くるき女というこれなりのちにたまかつらのきみ

にはつせにてたつねあいて六てうのいんへわたしたて

給て此御方にさふらはせし也けんしもはかしくしき物

におほしめしてめしつかわれし也ゆふかほのまきことは

人にしつむ心 きつねゆふかほ からうす 《なるかみ
ととなり》 「二〇ウ

《いにしへもかくやは人のまよひけん
またわかしらしぬしの、めのそら》 おきなかかは 世にしほしみて 《しのひありき
おと、

はと ふくろふ はらから きようたいなり 《わかむらさきねてはよかほのありかほに
くさのとさしのこ、ろおきなき》

第三若むらさき 《わかむらさきねてはよかほのありかほに
くさのとさしのこ、ろおきなき》

此まきをわかむらさきといふ事むらさきのうゑおさな

かりしをよみ給いし也 《てにつみていつしかもみんむらさきの
ねにかよひけるのへの若くさ》

「一八オ

「一七ウ

「二〇オ

とよみ給ひしゆへなりわかむらさきとはわかき^こ拂はおさな

きもしなれはなるへしこれはけんしま、は、ふちつほの

みやをおさなふより心にかけきこえていかにしてか

やるかたなく人の数を御らんするもしこの心やつくさん

と思ひ給ひし也これゆへによの中もうらめしくおほせし

に此むらさきのうゑはこのふちつほにはめいにておはし

ませはことにさせ給へりゆへに物、ゆかりをはむら

さきのくさのゆかりなど、いふ事なればよそへてよみ

給いしゆへにこのまきをわかむらさきとかきけり事

さら此まきおもしろくつくりたりとてこそしきふの

きみをはむらさきしきふとはなつけられ此きみを御

らんしそめてなかきよのともとなりこの人ゆへくもか

くれし給ひし事はけんし十七のとしわらはやみ

をしてきた山にたつときそうありとてめしけれ共

きやうへは出さる事とてまいらすさらはとてきた

やまへおはしますかのひしりかちしたてまつりければ

おこたらせ給ふなをのこりおそろしとてそのひは

と、まり給いて御かちなときたうありそのほとつ

れ、なれはたち出こ、かしこ見給へはかのひめきみ

のうはは此おこりおとし給ひたるひしりの御てし

そうとの御あね也此うはきみ心ちなやみひめきみ

をもつれておはしましたるをのそきて御らんしはし

めさせ給いてその時のことは こしはかき す、めこ

ゆふくれのかすみ わらはやみ おこたる うしろのやま

かいまみて 山の花はまたさかり 杉のとほそ わか

くさ たひねのそて たきのおと み山おろし

ふちさくら 山のとりおとろく

けんしきた山にてことを
ひき給ふにやまのとりも
虫喰も
おとろくはかりな□ふ也

「二二ウ

「二一オ

「二二ウ

「二二オ

くさむしろ やりみつ これらはきた山にてのことは

なり此むらさきのうゑはせんていの御こひやうふきやうの

みやの御むすめふちつほのきさきには御めい^うゑの御む

すめもおさなくより御は、にはおくれ給いてかのうは

きみにそたてられおはしましなりさて此ひめきみ

のうつくしき御かたちをのそきて御らんしていかに

してかこれをとりにたてまつりてわか御ま、にかし

つきたて、かの御かたみにも見たてまつらんとおほしめして

つゐにそのとしの九月のころうはきみにお

くれてきやうののにかすかなるすまいにておはしま

ししをとりにたてまつり給いてにうのいんのに

しのたいにわたしたてまつりもてなしかしつき

たてまつりてそたてまいらせ給ふひめきみの十の

としなりかのはらはやみしてきた山へおはしまし、は

三月つこもり也さてこそきやうの花はさかりすきち

りはて、やまのさくらはまたさかりとはいひけれ又

きた山にす、めこをかひ給ひしをいぬきといひ

しはらはにかしたりしをむらさきのうゑいたくおし

み給てなき給ひしすかたのほとおもはしけなりし

よのつねならすまし、しなりかのにけつるす、め

こをからすなとやとりつらんとむらさきのうゑの

なき給ふこゑをたつの一こゑといふ又此まきをくさ

のむしろやりみついもゑなと、いう事これはそうとの

かたへけんしをよひたてまつるとてくさのむしろも此

かたにこそま^うけなめと申されたる也いもゑとは

御しやうしんのまいり物、こと也これならすいもゑとは

御しやうしんの事なり又きた山に物かたりという事あり

といふ人ありともあらかうへからす御心ちのまきはし

「二四オ

「二三ウ

「二三オ

さにものかたりをめいしよなれは申出したりしその
 ときのあかしのうへのごともきゝそめ給いしそ
 かし又むらさきのうゑを二てうのいんへむかへ給い
 しあさひ色のきぬき給へりといふことありこれば

「二四ウ

九月にうはにおくれて十月にけんしとりたてま
 つり給へはいまたうはきみのふくのうちなれ共わざと
 そのあしたひ色のきぬをきたてまつることかとおほゆこ
 れを此まきのひしとはいへりかくて心さしならふかた
 なくてけんし五十三むらさきの上四十五にてかくれ
 給ふもかくれし給ひしも此なけきゆへ也くもか
 くれとはとんせいの事なり二十五のまきに見えたり
 ことは わらはやみおこりなりつゝらおり《きた山也ききたやま》《ふしの》
 すゝめこ かゝりひ やり水

「二五オ

《うとんけの花まちへたるちして
 みやまきくらにぬこそとまらね
 かか》ことありかほ てならひ
 いもぢかと《行すきかたき》さりのまかき《くさのどさし》むさしのといへは
 かこたれ給ふ ひとりゑみ 心おさなき ことすくなき
《世かたりに人やつたへんたくいなく
 うき身をさめぬゆめになしても
 《ねにかよひけるのへの若くさ》

ならひすゑつむ花《すへつむ花そてにぬれけんそらなきは
 すゝりのみつのなみはこすとも》
 此まきをすゑつむ花といふ事ひたちの宮と申て
 ふるきみやおはしきうせ給ひて御あとにひめきみ一人

「二五ウ

のこりておはしきいとかすかなる御すまいにてなかめす
 こし給いけりけんしきゝ、出し給いていふかしとおほし
 めしてたつねたてまつり給へりけんしの御めのご
 せうしやうのめいふとてうちにさふらいけるか此宮に
 したしくまいりかよふ人なればみちしるへして見せ
 たてまつりけりと思ひのほかにおはしけりその御かた
 ちいろしろくはななくしてさきあかくさう
 のことくおはしけりみたてまつりはしめけんこと

「二六オ

くやくおほしめしけれとも此すかたをは我ならて
 たれかは見たてまつらんとあわれにおほしみのほとゝいひ
 すてかたくいたはしくおほしてのちにかたゝのかすか
 なる所に二てうのあんひかしのたひにすませきこへ
 給ふけんしの御歌《なつかしき色ともなしに何この
 末つむはなをそてにふれけん》とよ

み給いし也くれないの花すへあかきもの也すへをつ
 みてとるなり此心にすへつむはなとはいふこのきみさ
 むきおりは御かほにはあかきこのみをつけたるかごとく事に
 ふれておかしくかのきぬきたる人これ也このきみを

「二六ウ

心にくくおもひてあふひの上のあにとうのちうしやう
 もこゝろかけてけんしのおはしますを見あらはさん
 とてあとにつきて行つるに見あらはしてけんしの御
 そてをひかへて《もろともにおほうち山は出しかと
 入かたみせぬいさよひの月》二月十六日

「二五オ

の事也ひめきみしやうのことをひき給ひしなり
 ことはに あれたるやと こと わひ人 はるのいさよい
 おうち山 かわきぬすへつむ花につけへしとうの 「二十七オ
 ちうしやうとはまことなし末つむ花には見てくや
 しきと付へしすへつむはなのことは くもりかちなる
 よもきうのやと《すきかき
 かりきぬのすむた》おうち山《いさよい
 の月》まつ《あたかけなる
 のゆき》
 おさなすかた みちのくのかみ そらなき《すゝりの
 みつ》
 第四もみちのか《もみちのかかさしのわたのかたはらに
 ひはことをひくまひのあしふみ》

此まきもみちのかといふ事はきりつほの御かとその比の
 いんの御かをつとめ給ふに比は十月なれはもみちをもて
 なして御かありさてもみちのかというもみちの下にて
 れいせん《しん
 せん》給ふそのすかたけんしのせいはいはまひ給ふに
 しくはなしうつくしさとへんかたなしかたゝはとうの
 ちうしやうまい給ふけんしには見おとりて花のかたはら

「二七ウ

にみ山木とそみへしかさしのもみちいたくちり

すきてかほのほひ色なかりしかはさ大しうやうたち

て御まへのきくをおりてさしかへ給ふゆふはへのすかた

か、やきてそ、ろさむきほとなるにみところお、く

はんへりそのほとのことには かさしのきく あしふみ

まいのすかた 夕はへ かほのほい ことかきもみち

やくはせいひは也たちにつけてといふ歌ありその夜は

ふちつほの宮けんしわかまのすかたをも御らんしつらん

とおほしめしてしのひて文ありその歌に

物おもふにたちまふへくもあらぬみの袖うちふりしこ、ろしるきや

かやうによみてたてまつり給へりそのかへしに

から人の袖ふる事はとをけれどたちいにつけてあわれとはみき

袖※ふること、はたうのやうきひのけいしやううゐのまい

によそへてけるにやさて此まきにかのふちつほの御はら

に御むまれ給ふこれはまことにはけんしの御こにておはし

けれ共みかとこれをはしろしめさすた、たくいな

き御おほえにて五つにてとくふにたち給ふ十一にて

御くらしいにつかせ給ふ御ちせい十八ねん也これをれいせん

いんと申けりその時のことは なてしこ 露けさ

まさる むかしのちきり このよにかゝる此まきにけんしうち

の女はうけんないしのすけといひてその比とし五十

七八の人けんしは十九に也給ふかの女はうをたはふれ

給ふそのことには おやのおや あめのなこり ひほのおと

あふき あつまや うたふ ひわゆに夕たち付へし

心はゆふたちしてすこしはれたるなこりにないし所のお

はしますこてんのかたさまをけんしゆきてあつまやう

たいてこそふみ給きふに此けんないしのすけひわのしやう

すにてかきしらへていたりし所へたちより給いてもの

「二八オ

「二八ウ

いひかわし給ふさてうちの御かたこれを御らんしてわら

わせ給ふこのないしのもとにおはしたる時とうのちうしやう

きたりあひてけんしのきみをそらおとししてのちま

てのはらひくさにしたりし也はなのかたはら みやまき

まいのあしふみ かさしのきく かさしのもみちこと

のほそを かうほり あふき ひはうりつくりこまのわたり《

第五花のゑん《はなのゑんおほろけならぬ春の夜の

此まきを花のゑんといふ事はもみちのかのつきのとしの

はるたいりにはなみありみなみ殿の、さくら①に花のもとにて

御あそひありたいを給てみやたちくきやうてんしやう

人ちけにいたるまでしをつくり給いしなりなかにも

けんしのこしうととうのちうしやうはしゆんはるのおうさへうくいす

つるといふたいを給はりしなりそのときこそのも 「三〇オ

みちのかのまひをおほしめし出させ給てその比とくふ

わしゆしやくゐんにておはしきけんしには御あにせちに

せめ給へはけんしたちてまい給ふとうの中將しやうもた

ちてりうくわゑんをまい給ふおもしろさに御ころをも

かけ給ふこれのちの世のまひとなりぬへしといひあへり

されはのちのよのためしなど、いふ事あるへしさてそのよ

けんしさりぬへきひまもとれいのふちつほわたりを

た、すみありき給ふほとにこうきてんのみつのとくちに

たち給ふにうちより若き女はうのこへにておほろ 「三〇ウ

月夜にしく物わなしとなかめしほとにけんしいとおもし

ろくおほしていひよりなさけふかくおはしましけり

此人ゆへにこそすまのわかれのうかりしめにもあひ

給いけれ此女はうはとうくふの御は、こうきてんの御

いもうとむつのきみとてとうくふへまいり給はんとて

もてなされ給しかこの花のゑん御らんのためうちへ

まいり給いてと、まりたまいしなるへしあかつきさと

より御むかへの人にかくと心へさせ給ひしそのおりの事は

みつのくち あふきくさはら 露のゆかり おさ、はら

「三二一オ

これらは此時よみ給ひし歌のことはなりあふきを

しるしにとてとりかへ給ひし也なしのかみのあふきわ

さくらのみへかさねにかすめるそらの月をみつにうつし

たる糸也此花のゑんのまきの事は二月也しのひくゝあ

いそめ給いしこときこへてのちみかとかくれさせ給て

とうくふの御代となり・ま、は、のこうきてんのき

さき心のま、によをととりおこない給てもとよりにく

かりし事なれはくのまきにけんしをすまへなかし

給ひしなりさてこそ六のきみもつゐに女ことたにも

「三二一ウ

いわれ給はてないしのかみにておはしけれ とくち

《かた□ふへきに》

あふき

《からきとそおもふ》

ふかき夜のあわれをしるも入月のおほろけならぬちきりとそおもふ

第六あふひ

《あふひくさあふきにつまのゑみかほのとおんなくるまはかもまつりか》

此まきをあほひのいう事一のまきにけんし十二にて

けんふくのよよりやかてむこになり・おはしましきた

のかたをはあほひの上という此まきにけんしの御あ

にしゆしやくいんの一の御はらひめみやかものいつきに

そなはり給ふ御ともにけんしはその比たいしやうにて

つかうまつり給ふそのきしきいみしくみことにて

「三二一オ

人めをおとろかし給ふ此きたのかたその比た、なら

ぬ心ちにてゆふきりのたいしやうをはらみ給ふ御身わ

つらはしくおはしませは心ちのなくさみにもとて

出、かものまつりを御らんするに又けんしのかよひた

まふ六てうのみやす所もしのひて出給ふこ、にくるま

のたて所を御ともの人にあらそひてみやす所の御く

るまをうちそんさしなとせし也かものまつりのくるま

あらそいとほこれ也かものまつりの事なれはあほひのまき

といふなり此うらみふかくしてつゐるにも、けになり八冊

「三二一ウ

卯八月にあふひの上をとりにころし給ふ此みやす所へけん

しのまいり給ふ事を御かとのいんのうへもしらせ給て

よにもかくれなきにかれくゝなる心さしのおもはずさを

うらみ給ふおりふしかゝるはちかましきことさへあれは

いと、思ひしつみ物、けとなりそれよりけんしはいよくゝ心

さしかれくゝになり行ほとに人をもよをもうらみは

て、御むすめのひめきみいせのさいくうにくたり給い

しにひきつれていせへくたり給いていせのみやす

ところとも申へし くるまあらそひ ねたむ かつ

「三三三オ

ならぬなどいふは此みやす所のくるまあらそひの時の事

なりかものまつりにかみそきとことありこれはかのま

つりのひむらさきの上とひとつ御くるまにてかものま

つりへ御らんしに出給ふに御くしのなかく見えさせ給へは

こよみのはかせに時とらせてむらさきの上御くしを

そかせ給ふかものまつりにかみそきというは此事也と

心へへし御くしそきはて、ちいろといわひてけんし

のよみ給ふ 《はかりなきちいろのそのみるふさの》とあり

「三三三ウ

とよみ給いし也四月かものまつりをはみあれともい

うなりさるほどにかのあふひの上月ひかさなり御さん

ちかくなり給ふほとにみやす所のふかき御うらみ

それおろかならんや御なやみ大事にてかきりのさま

なれはまつりの御はらいさまくゝの御いのりかち思ひやるへし

そのおりあふひの上身からなのり出しなりこのあふひの上

の御かたにこまをたきはんへりしにみやす所の

御そてにこまのけふりふかくしみつきしことこそ

おそろしかりけりさてからくしてわかきみむまゆふまりの大しやう 「三四才

れさせ給ふそのほと心つくしいふかきりなくよろこひ
の、しりみな人によりやすみてすこし心ゆきて若

きみの御もてなしにひをおくるほどに御うふやはつか

はかりありては、あほひの上つゐにかくれ給ふおりふし

秋ののそきめなれはけんしのきみもち、のおと、も

うちへまいり給ふこれそかきりなりけるまかり申にけん

しをまはしめしてさま／＼うちかたらいて出給ふにつ

ねよりも御めと、まりて御らんしおくりけると

かやあわれなりしこと共なりすてにたえ入ぬ 「三四ウ

れはうちへつけきこえ給ひければそのよのの

そきめもやふれぬ《あほひの上廿六にてかくれ給ふ》 あしをむなくして

かへり給ひぬれ共か、るひまをはからひたる物、け

なれはかひあらんやおと、は、みや《けんしの御おは也》 《きりつほの御かたの御いもと也》

けんしのみやのしん中思ひやるへし八月十五日の事

なるにもしやいきかへり給ふとて廿日までおき

たてまつり給ひたれ共かわり行ことのみおほけ

れはそのかいなくしてつゐにとりへのへおくりま

いらせ給ふそのほとのことには ひとりね かたみのこ

かたみのこと しのひくさ その時のわかれのきわの事

なれはあきのはかれのくなどに付へしさて四十九日す

きわかこてんにてうのあんへ帰り給ふ御とし十二

いとけなかりしほどそかしすみなれ給いしきたの

かたかくれ給へは何ゆへにかの大しんのもとにもすみ

給ふへきなれは若きみをは此殿にと、めたてまつり

わかこてんへかへり給ふおりふしのあわれさいはんかた

そなかりける十月のことなれはしくれふりあらし

ふきあれてひころつかへなれし女はうたちなども心

をくるしめ袖をしほらぬはなかりけりけんしの宮 「三五才

もたちさりかたくなこりかなしくて物うくおほし
めしなからなく／＼帰り給いてむらさきの上の御

かたへわたり給ふしはしのほとにしみしくさかりにいつくし

く見はなちかたし此むらさきの上とをの御としより

とりもちそたて給いしか共いまたおさなくおはしま

すかゆへにこのひめきみもけんしわかものにおほし

めしたることとはゆめにもおほしめしもよらす

くるほどにある夜此むらさきの上ににいまくらありて

つきのよけんしの心しりこれみつをめしての給ふ

事ありこんやはねのこのいわひなりあすの夜かやう

のもちいかくかすにあらてした、めてまいらせよと

おほせつけらるこれみつうけ給はりてねのこはいくつか

つかまつるへきととい申しかはけんしみつかひとつにて

御らんしとの給へは心へてたちぬきみ物なれたるさま

やとこれみつを心まさりしておほしめしぬこれらは

此物かたりにけしかるひしといへともしるす也この心は

にいまくらいぬのひつきのよいのひにて三日のよは

ねのひにあたり大かたなんによあいそめて三日の

よはふん／＼にいわう事なれは御いわるあるへきに

あふひの上かくれ給いて帰り給ふおりふしなれはこと

ことしく人のおもふへき事をは、かりてことさら

おんひんのきにてこれみつにしのひやかにいへりそれ

を心へて何ともとひたてまつるへきならねはうけ

たまはりてたちにきみつか一つとはねのこさんはいを

一せんにすへてつるのくちにはしをくわへさせて

出す物なれはけしきはかり三か一にてあらんする也と

「三五才

「三六才

「三六ウ

「三七才

いへりおもしろかりし心なりさてつきのよ御いわひし
たててもちてまいりせふなこんの女はうときこへ
しはむらさきの御めのとたりそれはおとなしくてはつ
かしくやおほしめすへきとてむすめのへんのきみ
といふをよひてまいらせたりきつきのあしたとり

出すこそ御めのとたり心さしの色をあ
われともめてたくおもひけれそのほとことは みつかひとつ
みつかのよのもちい いのこ ねのこ にいまくらむら

さきの上御とし十五比は十月けんし廿二と心へへし 「三七ウ

あほひのことは おふなくなるま あふきの の、みや 《なか
つかさめし》《のそきめ也》りうたん《なてしこゑみかほ そら

いろのかみ《花たのかみなり》しものほな よ・ころもるの

第七さかき 《さかきはをとりいもすこき松かせの
はなちるさとのいりかたの月》

此まきをさかきといふ事歌に 《かみかきはしるしのすきもなき物を》
心はあふひのまきにきこえつる六てうの御やす所御むす
めのにしのみやのいせへけちやくの時にまつきよまいり

とての、みやにすみ給ふ所へさすかにわすれもはてす
してうき物なからいせまてくたり給ふなこりも 「三八オ

おしくおほして比は九月十六日のゆふつかたゆふつくよ
はなやかにさし出てよろつ物あわれにておほしめした
ちてあしろくるまのしのひやかなるにうちやつれたる

さまざまかのの、宮へけんしまいり給ひければかしこの
ありさままことにい中めきてしはかきをおうかきに

してくろきのとりにかみさひてあさちかはらも
かれくゝにふきしほれたる秋かせ身にしてみむしの

こへにまかひたる物、おとたえくゝきこへてひたきやはかり
くわけんの事也

かすかにして人のすみたるけしきもせずこ、物 「三八ウ
おもわしき人すみてこそ思ひのこす事なくお

はすらんとよそへておもひやりしよりあわれにて此
ほとのとたへを我なからうらめしくおほしめして御ま
ゑのさかきをいさ、かおらせ給いてみすのうちへ
さし入てものかたりなし給ふおりのうたそかしそ

のゆへにさかきとはいふさてたまゝの御物かたりに
あかつきちかくなりしかは帰り給ふそのことは夕月よ

こしはかき くるきのとりに まつむし あさちはら
あかつきのわかれ 秋のくさ むしのね す、か川 いせ

まてやそせのなみ これらの事・の、宮に付へし 「三九オ
いかにもたひのそらの物うきよしあかぬわかれの心

ねをいせのことによそへて付へしさてこのまきに
御かと十一月にかくれさせ給ふその比よりことにふ

れてものうくおほしてつねにわか御てんかちにて
よもむつかしくなり行てないしのかみの事もこの

まきにはあらはれてつるにすまへなかせられ給ふきり
つほの御かと・いつれのまきにはふきよなりけるやらん

と人たつねむにしらすといわん事むけなればかき 「三九ウ
つけはんへり此まきのことのは、宮・おとろへたる

あさちかはら ひたきや くれくゝのむしのね 物おも
しろさ もの、おと まつかせ こしはかき いたや

くるきのとりに しめのほか すのこ 《まれんかきしおり
さかき 入かたの月 かつらかは 大やしま 《にほんこく
なり》

《なをりこしをまつやた、さん》 《なかくおくりたてまつる
つかいの事也》

ものみくるまわかれのくし す、かかわ わかれのみそき
とのいもの、ふくる いつきのみや あさかほ 《紙
はらきたなきき
からふる也

とのい申 くものはやし 《ゆくゝあかしにてまつる
《もみらおりふらしきくの花》 心のおに 「四〇オ
第八はなちるさと 《花ちるさとすむ人やたれな河の
《なにはなのはつか月まで》

このまきを花ちるさと、いふ事 《たち花のかほなつかしみほど、きす
《はなちるさとをたつてそと》

此うたゆへなりけんしな川わたりへしのひておはし
まししにみちにて御らんしりたる所ありけりさて

この歌をよみていれ給いし也そのことは さみ

たれのそらに かたらふ（三） ちはな やとのかきね

これらはみなさつき（三）の比の事也ほと、きすにもたち

はなにも付へしな（三）か河（ほと）《花ちるさと 廿日 かつかの月

第九すま（すまのうらうき世のにしにる月のぬる、かほなるそてのうあかな）《わかれはわれこそうけれあかつきの》 「四〇ウ

これはけんしの御あにしゆしやくいんの御くらひの

時花のゑんにあいそめしおほろ月よのないしのこと

みかとさしも時めかせ給ふないしのかみの事きこ

へてうちの御は、おふきにはらたち給いてすまへ

なかし給ふによりてすまとはいうなり比は三月廿四日

なりそのことは かたみのか、み おもやせたる かつら

かくれのおもかけ あかつきかけていつる月これらはす

まへおもむかせ給ふとき（む）のらさきの上になこりをおし

み給いしことはなりまことにそのなこりさこそお

ほしけめおさなくよりおふしたててち、は、に

なりてもてなし心さしならふかたなくおほして

ちか比かりそめの夜かれたにもなかりしにいつの月

ひをかきるへき御わかれならねはせんかたなしかなく

おほししつみ給ふ御ちやうたいより出ひんかき給ふ

とて此比のおもひにおもやせ給へは我なからなめ

ならずうつくしくおほしてこのかけのやうにやや

せてはんへるとてけんしよみ給ふ 「四一ウ

身はかくてさすらいぬともきみかあたりさらぬか、みのかけははなれし

御かへり事むらさきの上 《わかれてもかたにとまる物ならば
か、みを見てもなくさみてまし》

きにはかまいりといふ事ありなかせ給ふ御いと

まこひにこいんの御むしよきた山へまいり給ふち

ちのみかとの御はかなりさてすまへくたり給ひてみ

やこにひきかへてかすかなる御すまひおしはかるへし

所はゆきひらのちうなこんの此うらになかされてもし

をたれつ、わひ給ひけんところちかきほとなれば

なみこ、もとにたちくる心ちしてせんかたなくあわれ

なりこ、ろおちいてかりそめのいゑいなれともあ

たりおかしくとりつくりいてまつのはしらに

たけあめるかきいしのはしなとやうかわりてなか

におもしろくにわのくさたていしわかきのさくら

なとほりうゑてときのほとに見所ありてしなし

給ふそのほとのこととは わかきのさくら にわの

やりみつ にわのくさ そのときのこととはなり

又しはという物とはおはしますうしろの山に 「四二ウ

たつけふり何そとたつね給へはしはという物をおり

くふるたき、のけふり也といふけんしいまた御らんし

なれすしてめつらしくおほしめして

やまさとのいほりにたけるしは、もこととひきなんこふるさと人

とよませ給ふもしほやくけふりにまかうなといふ

こ、ろ也さてやう、なかさめの比にもなりぬさま、とり

しつめてきやうへつかいをたててのほせ給ふ所、の

御かへり事共に見給ふにもいかはかりか御なみたのもよ

おし也けんそのおりの・ことはにかきつくしかたしさて

程なく秋にもなりぬさらてたに秋は物あわれなるに

心をすまのたひねのとこ思ひやらる、も露けし

ひとりめをさましつ、よものあらしをき、ふして

なみこ、もとにたちくる心ちしてゆき（平）ひらの中

「四三オ

なこんのせきふきこゆるとよみけんもおほしめし
合給いてなみたおつとは覚ねとも御まくらもうく
はかりなりみやこよりもち給ひたりしことをひきよせ
て心のまゝにひきすまし給ふに我ながら物すこく

おもしろくおほしめしけりそのほとのことには
「四三ウ

ともちとり ねさめ・とこ よものあらし たちくるなみ

うきまくら つきのかほ これらはみなすまのうき

すまひの事なりいかにもすまにはみやこをこふるふせい

きなをたちしなと付へしさてさかきのまきに

いせへくたり給いしみやす所よりかくてけんしのおか

ます御とふらいに御つかいありこれせいせよりすま

へのつかひふみなどすまといふ事共也しきのそのことはに

《みやす所よりすまへのふみ也》いせしま 《五六まいそかし
まきかたねたる文》《みちのくのかみ》しほひのかた

いひかいなき身 うきめかる いせをのあま おもひやれ

これらはみやす所のふみありし歌のことは也かくてそのと

しもくれぬつきのとしの春の比かくれ給いしあほひの

上の御あにとうの中しやうけんしすまへうつらせ給い

しよりあさゆふこいかなしみかゝるよのそしりをも

しらすふかきつみにあたるとてもいかゝせんと思ひてす

まへおはして一夜とまりてしかよみなどしてなくく

かへり給ふけんし糸ならすなつかしくめつらしくおほして

くろこまこまふ糸なとたてまつり給ふその程のことはに

おなしなみた くもぬ にひとりくろこまこまふ糸 なみた

そゝく はるのさかつき これらは申しやうのおはしたる

ときのこととは也なつかしくあかぬなこりなどのふせいを

付へしあわれにありかたき心さしにはこれを申なり

かくてその年三月一日みのひはらひし給はんとて

けんしうみつらへ出させ給ひければにわか雨かせ

ふきあれてうみのおもてにふすまはりたるかごとく

その時のことは ひちかさあめ《かさとりあへす
そてをかさす事也》人かた

おふうみのはらひありその、ちやうくとしてたひの

御所へ帰り給ふなをあめかせやますしてかみなりいな
「四五オ

ひかりひらめきておそろしき事かきりなしあめひ

かすをふれはみやこよりところくの御つかいまいりけりその

ときむらさきの上よりの御歌に《うらかせやいかにふくらんおもひやる
袖の事ぬらしあまなき比》

とよみ給ひし也所よりありし事なかしくして

くわしかゝすあめは三月一日より十三日までおやみもなく

ふりぬ十三日のあかつきおはしますらうの上になるかみ

おちてあさましなといふはかりなしその時御くわんともたて

給ひけるやらん雨かせすこししつまりくもきえぞら

もみどりの色になりしかはすこしまとろみ給ひ
「四五ウ

たる御ゆめにつけありこいん御てをとりて此うらを

さり給へとのたまいし也されはゆめのつけとも付へし

すまのことは さとはなれ うみつら あまのいゑい

あしろ はつかよひ とのいすかた こと もろこし

山かつめきて 宮こはなる、たひすかた ちさと

あわれにすこき いせのつかい いせしま からのかゝみ

あしふけるや しらぬ国 なかさめ 松しまのあま

かどりのきぬ よにしほしみて かへしふみ いせ人

こゝろつくし うみすこし まくらをそはたつ
「四六オ

てならひ よものあらし まくらもうくはかり

なみこゝもと すゝちゑた うた うたふくたすへしたへ也つくりへ

くさのはな ちいさきとり たまくら かりのつら

とこよのくに 月のかほ 月の宮こ いまこゝにあり

つなてひく舟 山さと うしろの山 よのあちはひ

しほといふもの ゑひすの国 ともちとり すみよ

しのかみ 二月廿日 こすく六 あまのいわや いし
のはし わかきのさくら まつのはしら たけ
あめるかき あま人のさへつる むまにいねかふ 「四六ウ
おふみや人 たかしほ あすかひうたふ さけのかわらけ
はるのさかつき ゑいのかなしみ たつ ふゑ みのひ
のはらひ 人かた うみのふすま（ほりたるなり）

（以下空白）

「四七オ

※判読不能。文字を擦り消した痕跡がある。